

滑落停止ができたなら、はじめて、パートナーやね

— いま一度、防御技術を —

OWCC 中川和道 20260115

5年前2021年、『事故防止は仲間の知恵で — 事故の記録 第2集 —』[1]が大阪労山の仲間によって作られた。その中で河野仁 副会長が「防御技術をよく勉強、研究することが大切」という一文を寄稿された。もう一度読み直してみた。みなさまと分かち合いたいと思う。

労山の仲間たちが登山者として育つには、まず、山岳会に入会する。はじめは「新人」と呼ばれ、先輩から手ほどきを受ける。昔も今も、これは変わらない。新人は準会員とも呼ばれ、引率登山でつれていってもらうのが権利だ[2]。実力をつけて自立し自主登山ができる水準になって初めて、会のリーダー会が認め、「会員」あるいは「正会員」になれる。

正会員になれる条件は山岳会によって千差万別であるが、ここでは、防御技術の到達要求レベルについて見ていこう。

雪山では、何といっても、滑落停止が重要だ。雪氷での滑落は「誰もが、必ず起こす」というのが常識だ。雪や氷の状況は千変万化の様相を呈するので、どんなに技術を高めても、滑落の発生をゼロにすることはできない。発生ゼロを目指すのではなく、必ず起こす滑落が事故に至るのを阻止できる滑落停止技術の習得を目指すことこそが命を救う、と考えるのである。

滑落停止技術は、必須となる防御技術の典型である。滑落停止ができない人は自主登山で冬山に入ることにはできない。連れて行ってもらい、危ない時にはロープを結んでもらって行動する、引率登山に徹するべきである。「滑落停止、自信あります」となって初めて、自主登山のパートナーとして、パーティーを組める。さらに滑落停止が教えられるようになると、コーチになれる。リーダーへの一歩を踏み出すのだ。

中川の周りでも、滑落停止技術によって助かった事例は多い。2022年5月、穂高岳沢で仲間の一人が滑落した。何度も何度もピッケルを打ち込んだが、雪が腐っていてずるずると滑り続けた。断崖の真上でついに停まった。日頃の訓練の成果である。あの時は、本当に怖かった。有名な登山家の例では、遠藤晴行さんが「エベレストでの滑落」というコラム[3]を書いておられる。必読だ。

中川もかつてそうだったが、雪山を始めて間もない頃は、防御技術よりも、攻撃技術に目を奪われがちだ。某首相の発言のように、「そんなことよりも」、という訳である。だが、穂高で自分が滑落し、必死で停めた経験をした。「防御技術がないと、これは本当に死んでしまう」と気づいた。

リーダー養成カリキュラムでは、防御技術が重点で、登る技術(攻撃技術)は2の次。宇宙飛行士の訓練では、防御技術訓練とトラブル対処訓練が、何と、90%を占めるという。こうやってリーダーになっていくわけだ。我々も参考にするとよさそうだ。

みなさまも、滑落とその停止のご経験が一度や二度はおありだと思う。「防御技術をよく勉強、研究することが大切」なことを、大阪労山の仲間たちと、いま一度、分かち合いたいと思う。

[1]大阪府勤労者山岳連盟 事故の記録 編さん委員会、『事故防止は仲間の知恵で 大阪府勤労者山岳連盟における事故の記録 第2集 1998▶2020』、2021年9月1日。

[2]引率登山・自主登山とは何か、については、山の教室「パーティー論・リーダー論」で学んで下さい。

[3]遠藤晴行、『雪山登山』、ヤマケイテクニカルブック3、2006年11月、90ページ。